台大日本語文研究第 14 期
2007 年 12 月，頁 181-208
本文 2007-1026 收稿，2007-1211 通過刊登

# 以中日語對照研究觀點探討具有補文關係的複合動詞

施姵伃*

## 摘要

日文與中文皆具有數量豐富的複合動詞。但是根據其型態上的特徵以及語順的不同，這兩種類型不同的語言，在複合動詞的構成上，各有其不同的派生途徑。本論文主要試以「語彙概念構造」探討中文與日文當中，補文關係複合動詞其派生途徑的異同點，進而考察這些異同點與兩個語言在類型上的特徵之間的關連。

關鍵詞：語彙概念構造、論元構造、完結性、結果性、時間順序原則

* 筑波大學人文社會科學研究科博士生

# $V_1V_2$ Compound Verbs of the Complementation Type in Japanese and Chinese

Pei-yu Shih*

## Abstract

$V_1V_2$ Compound Verbs exist in both Japanese and Chinese. However, the mechanisms behind the formation of such verbs in the two languages are different because of their typological differences. This study attempts to explain the different mechanisms found in the respective languages from the viewpoint of Lexical Conceptual Structures.

Key words: Lexical Conceptual Structures, Argument Structure, telicity, resultatives, Principle of Temporal Sequence

* Graduate School of Humanities and Social Sciences ,University of Tsukuba

# 日・中両語における補文関係を示す複合動詞に対する対照研究

施佩伃*

## 要旨

日本語と中国語は、いずれも、複合動詞が豊富な体系を持つ言語である。しかし、語の形態的特徴、文における語順といった基準において、類型的に異なる両言語は、複合動詞の形成において、異なるメカニズムをもつ。本論文は主に「語彙概念構造」の観点から、両言語の補文関係の複合動詞の派生メカニズムの共通点と相違点を解明することを試み、さらにそれが両言語の類型的特徴とどのように関わりをもつのかについて考察する。

キーワード：語彙概念構造・項構造・完結性・結果性・時間順の原則

* 筑波大学人文社会科学研究科大学院生

# 日・中両語における補文関係を示す複合動詞に対する対照研究

# $V_1V_2$ Compound Verbs of the Complementation Type in Japanese and Chinese

施佩伃

## 1. 序論

日本語と中国語は、いずれも、複合動詞が豊富な体系を持つ言語である。しかし、語の形態的特徴、語順といった基準において、類型的に異なる両言語は、複合動詞の形成において、異なるメカニズムをもつ。本論文は両言語における補文関係を示す複合動詞の派生メカニズムの共通点と相違点を解明し、それが両言語の類型的特徴とどのように関わりをもつのかについて考察する。

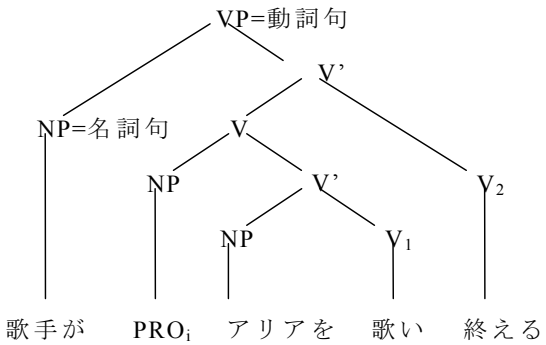
では、「補文関係の複合動詞」とは、どのようなものなのだろうか。

影山（1993：96）は、日本語の複合動詞において、(1) に挙げるような複合動詞が、前項動詞と後項動詞が補文関係にある統語的複合動詞であるとしている。

（1）a.始動：-かける、-だす、-始める
　　b.継続：-まくる、-続ける
　　c.完了：-終える、-終わる、-尽くす、-きる…
　　d.未遂：-そこなう、-遅れる、-忘れる、-残す…
　　e.過剰行為：-過ぎる
　　f.再試行：-直す
　　g.習慣：-つける、-慣れる、-飽きる
　　h.可能：-得る

また、影山（1993：79）によれば、「歌手がアリアを歌い終える」という複合動詞を含む文は、(2) のような統語的補文構造形式に由来すると想定している。

（2）

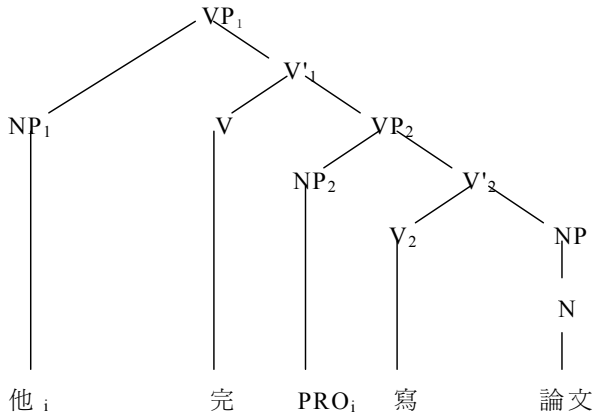



即ち、「歌手がアリアを歌い終える」というのは「歌手が[（自分が）アリアを歌うこと]を終える」という補文を、基底構造において埋め込んでいる、という分析である。

中国語においても、同様に、「-終える」に対応する複合動詞として、〈-完 wán〉という複合動詞が対応し、例えば、例文（3a）は、（3b）のような補文構造を基底構造としてもつと分析される。

（3）a.他　寫　完　　論 文　了（彼は論文を書き終えた）。
Tā　xiě-wán　　lùn wén　le。
彼　書く-終える　論文　完了

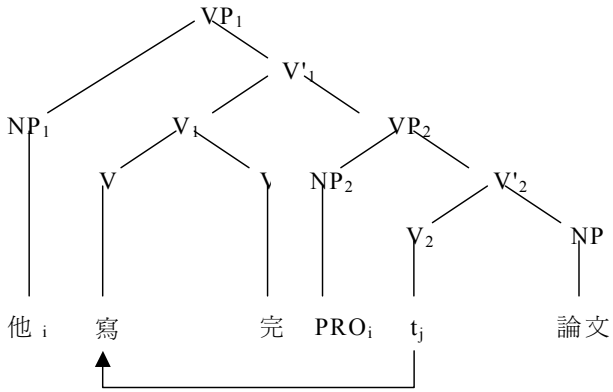
b.




（3b）が示すのは、まず、主文の $VP_1$ は、$V_1$〈完 wán〉を主動詞とする構造で、$V_1$〈完 wán〉は、補文として、$VP_2$ をもつ。主文の主語〈他 $_i$〉と補文の音形をもたない主語 $PRO_i$ が同一指示であることが、同一指標‘i’が両者に与えられていることにより示されている。

（3b）の基底構造から、（3a）を派生するには、（4）のように示される「編入」（Incorporation；Baker1988）という操作が必要である。

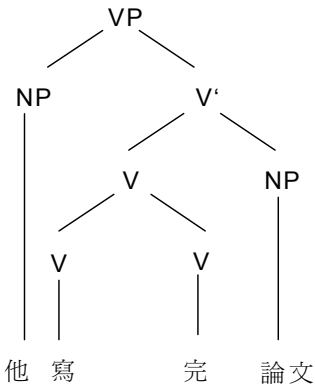
（4）




（4）では、主文の動詞〈完 wán〉に、補文の動詞〈寫 xiě〉が編入さ

れることによって〈寫完 xiě-wán〉という複合動詞が派生されることを表示している[1]。編入後の図は（5）のようになる。

（5）




望月（2006）では、中国語の「述補式複合動詞」（Predicate-Complementary Type）[2]の $V_1$ と $V_2$[3]の間の意味関係は、$V_2$ が $V_1$ の結果を表すという従来の分析に留まらず、日本語と同じように補文関係という新たな意味関係が存在することを提示している。

本稿では望月（2006）の中国語にも補文関係の複合動詞があるという考え方に引き続き、影山（1993：96）の意味による統語的複合動詞の分類に基づき、「語彙概念構造」と「項構造」によって、両言語の補文関係の複合動詞分析を行う。望月（2006）の両言語の派生

[1] 理論的には、〈完寫 wán-xiě〉が可能であるが、Tai（1985）によれば、中国語は「時間順の原則」（Principle of Temporal Sequence）に従う言語ということで、その時間順が、語順を決めるわけである。それゆえ、〈完寫 wán-xiě〉ではなく、〈寫完 xiě-wán〉になっている。

[2] 結果複合動詞（Resultative verb compound）とも呼ばれる。述語+補語という形で現れ、後ろの位置に来る形態素は最初の形態素の述語の結果を補足するためなので、補語と呼ばれるようになる。従って、述補式複合動詞と呼ばれる。

[3] 厳密的に言うと、述補式複合動詞の 2 つ目の形態素は動詞か形容詞が来る。ここでは便宜上 $V_2$ と呼ぶ。

メカニズムの相違について、中国語においてすべて結果性を持つものなので、$EVENT_1$の完結性を必ず要求する一方、日本語は結果性があるものであると$EVENT_1$は完結性を要求するが、結果性のないものであると完結性を要求しないということで、日中両語の最大の相違点は$EVENT_1$の完結性を要求するか否かであるという結論に達している。本稿では最大の相違点は完結性ではなく、結果性であると論じてみたい。また、語順における時間順原則、統語的な主要部の位置という観点からも見る。

用例収集にあたっては、以下の 2 つのコーパスを用いる。

A.『中日対訳コーパス（第一版）[4]』（2003、北京日本学研究センター編）

B. 《漢語動詞-結果補語搭配辞典》（王硯農等編：1987）北京語言學院出版社

## 2. 理論的枠組み

### 2.1 項構造（Argument Structure）

述語はそれが要求する項の数によって、1 項述語、2 項述語、3 項述語のようにタイプわけできる。さらに述語にはそれが項に与えられる意味役割の観点からの分類も必要である。項の意味役割の違いは文中のほかの要素との共起制限に影響する。生成文法に基づいて意味役割は動作主（Agent；Ag）、対象（Theme；Th）、経験者（Experiencer；Ex）、原因（Cause；Ca）、着点（Goal；Go）、起点（Source；So）、場所（Location；Lo）、経路（Path；Pa）、事象（Event；Ev）などを指す。

項構造の視点から考えると、動詞は他動詞、非対格自動詞、非能格自動詞に分けられる。影山（1993：47）によると、これらの動詞は下記のような項構造の形で表示できよう。

[4] この対訳コーパスは、以下のコーパスを含む。まず、日本語が原作のコーパスは、文学作品 22 篇とその中国語訳、文学作品以外 14 篇とその中国語訳である。中国語が原作のコーパスは、文学作品 23 篇とその中国語訳、文学作品以外 16 篇とその日本語訳である。

（6） a. 他動詞：（Agent <Theme>[5]）
b. 非能格自動詞：（Agent 〈 〉）
c. 非対格自動詞：（ 〈Theme〉）

日本語の動詞＋動詞型の補文関係の複合動詞と中国語の補文関係の複合動詞は（6）のような動詞分類による動詞の結合はどのようになるのかは後ほど検討することにする。

## 2.2 語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure，以下 LCS と略する）

ここでは、影山･由本（1997：6-8）における語彙概念構造の説明を以下、要約する。

動詞の意味を分析する際にとりわけ重要なのは、状態（state）、活動（activity）、変化（change）といったアスペクトを軸とする分類である。次は語彙概念構造を示す Vendler（1967）から Dowty（1979）に至る動詞 4 分類を基にしている。

（7） a. 状態動詞（stative verbs）：[STATE [ ] y BE [AT-z]]
b. 活動動詞（activity verbs）：[EVENT [ ]x ACT ON-[ ]y]
c. 到達動詞（achievement verbs）：[EVENT BECOME [STATE [ ] y BE [AT-z]]]
d. 達成動詞（accomplishment verbs）：[EVENT [ ]x ACT ON-[ ] y] CAUSE [EVENT BECOME STATE [ ] y BE[AT-[ ] z ]]

本論文では、本章で説明した理論的枠組みに基づき、日中両言語における複合動詞の派生の特徴を論じていきたい。

## 3. 日本語と中国語における補文関係の複合動詞の先行研究

### 3.1 日本語の補文関係の複合動詞の先行研究

#### 3.1.1 影山（1993）

影山(1993:75-175)は V-V 型複合動詞を意味の透明さ、語彙照応制

[5] 〈 〉は内項（internal argument）を表わす。

約、主語尊敬表現と受身形の現れ方及びサ変動詞や動詞の重複形によって、語彙的なものと統語的なものに区別する。

意味の透明さという点で、語彙的な「飲み歩く」と統語的な「飲みかける」を比べると、前者では「飲む」対象は酒類に限定されているが、後者ではどのような液体でもよい。このように、語彙的複合語は様々な程度に意味が慣習化されているが、統語的な複合語は意味的に透明である。また、語彙的複合語の場合には、例えば「泣き叫ぶ」は「泣く」と「叫ぶ」の平行動作を表すが、「泣きはらす」では「泣く」は「はらす」の原因を表す、という具合に多種多様な意味関係が見られる。一方、統語的複合語は、すべて補文関係として捉えることができる。

### 3.1.2 由本(2005)

由本（2005）では主に 2.2 で紹介した語彙概念構造に基づき、日本語の動詞+動詞型の複合動詞の可能な概念構造の合成のタイプを論じ、その中に補文関係をなす類があると明示している。

日本語の統語的複合動詞はすべて補文構造をなしており、LCS の形成パターンは補文関係をなす語彙的複合動詞のに類似しているが、その LCS は 4 で論じる。

要するに、影山、由本の先行研究を通して、中国語の述補式複合動詞にも補文関係のものがあることを 1 つのカテゴリとして取り立て、また、それを通して、日本語と中国語の複合動詞のメカニズムを解明したい。

## 3.2. 中国語の補文関係の複合動詞先行研究

### 3.2.1 Tai（1985）

中国語は語順に頼る言語である。Tai によると、その語順は動作が発生した時間順を反映しているということである。時間順が語順に反映されている根拠として､以下のようなパターンが挙げられる。

（a）動詞句が 2 つ連続している場合（serial verb constructions）：前

の位置に来るものは必ず先行事象である。

e.g. 約翰上樓睡覺 Yuē hàn shàng lóu shuì jiào（ジョンが上に上がって寝る）。/*約翰睡覺上楼。

（b）複合動詞（verb compounds）の場合：前の位置に来るものは必ず先行事象である。

e.g. 張三打死了李四 Zhāng sān dǎ sǐ le lǐ sì（張三が李四を殴り殺した）。/*張三死打了李四。

他にもたくさん時間関係が見られる。

以上は時間順の原則に従う中国語の言語現象である。本稿のテーマである複合動詞においても、時間順の原則が重要な要素の1つとして認められることを考慮し、分析の手立てとして考察に加えることにする。

### 3.2.2 湯（1989）

ここでは湯説による中国語の複合動詞の内部構造に基づいた分類を紹介する。湯（1989:154-161）は、それらを「述賓式」（Predicate-Object Type）「述補式」（Predicate-Complement Type）、「偏正式」（Modifier-Head Type）「主謂式」（Subject-Predicate Type）、「並列式」（Coordinative Type）と5分類している。生産性が一番高いのは「述補式」である。

中国語で補文関係をもつと考えられる複合動詞の多くは、述補式の内部構造をとる。

### 3.2.3 その他

Tai（1984）、中島（2007）などでは、中国語は結果重視型言語であると示している。まず Tai は Vendler の動詞 4 分類法に基づいて中国語の動詞を分類すると、中国語の単純動詞において達成動詞（Accomplishment Verbs）は存在しないと指摘する。そして、それを担うのは「述補式」複合動詞であるという。また、中島は日中両言語の受身表現と日本語の自他対応動詞とそれに対応する中国語を考

えると、中国語は結果補語、結果性を明示する数量詞、補語である“得”といった結果表現が現れるという。

「前項述語が原因事象を表し、後項述語が結果事象を表す」というスキーマを持つ「述補式」複合動詞は一番生産性が高いというのは中国語が結果重視型言語であることが原因だと考えられる。この生産性は、日本語の統語的複合動詞が示す生産性と合い通じるものであるが、果たして中国語の述補式複合動詞は日本語の統語的複合動詞と共通する性格をもつのであろうか。

## 4. 日本語の補文関係の複合動詞

本章では、影山（1993：96）の列挙している $V_2$ に従い、『中日対訳コーパス』（第一版）を利用して、4.1 では日中両言語における複合動詞の形式で互いに対応できるものを提示して、4.2 では互いに対応できないものを提示する。また、その原因を図で明示する。

### 4.1 日本語における複合動詞が示す意味・機能の内、中国語における複合動詞の形によって対応が可能なものを提示する

コーパスの収集によると、完了、始動、習慣、過剰行為を表す日本語における複合動詞は、中国語の複合動詞の形によって対応可能であることが見られる。大雑把に言うと、日本語の完了複合動詞を中国語の〈-完〉に、始動の複合動詞において一部分を中国語の〈-起/起來〉に、習慣の複合動詞を〈-慣〉に、過剰行為の複合動詞を中国語の〈-多〉に対応する。

本稿では紙面の関係上、「-始める」に対する考察を省略するが、完了の「-終える/終わる」というアスペクトに関わる局面動詞を例にし、「結果性」と「完結性」の素性を考える。

#### 4.1.1 「 - 終える/終わる」に対する考察

この項では、実例をいくつか取り上げて、それぞれの $V_1$ と結合する LCS を見ていきたい。

（8）a. 読み終わった後で、自分を襲って来る友達をつき放すような冷やか気持が自分でいやだった。（あした来る人）

b. 読み終わる→［Ag, Ev］

c. 每次看完信，總是有股恨不得把同學一把推開的冰冷情緒襲擾着她。（情系明天）

d. 看完→［Ag, Ev］

（9） a. そこで、順番に自分のマラソンをこなし、走り終わるとまたボクのところに戻ってきて隊列を組んでくれた。（五体不満足）

b. 走り終わる→［Ev ］

c. 他們依次先按自己的速度跑，跑完後又回到我身邊組成隊列保護著我跑。（五體不滿足）

d. 跑完→［Ev ］

「-終わる/終える」の語彙概念構造は（10）のように想定できる。

（10） a. 他動詞と結合する場合→[6]他動詞：（8）読み終わる

[BECOME [[$_{EVENT}$ x ACT ON y] BE AT-z]]

|

FINISHED

b. 非能格自動詞と結合する場合→非能格自動詞：（9）走り終わる

[BECOME [[$_{EVENT}$ x ACT] BE AT-z]]

|

FINISHED

c. 非対格自動詞と結合する場合：該当なし

ここで $V_2$ はイベント全体に対して叙述しているという補文関係が見られる。この LCS は「－終える/終わる」が瞬時の動作を表し、瞬間動詞であることを表し、動作が何らかの状態に至るという行為の終了点を述べる。よって、完結性を持つ。CAUSE という述語を持

[6] 「→」の後に来る動詞のタイプは結合した複合動詞のタイプを指す。以下も同じである。

たないため、結果性がないことを示す。中国語の「-完 wán」という補文関係の複合動詞に対応する。

## 4.2 中国語における複合動詞の形によって対応が不可能なものを提示する

継続、可能、再試行、未遂を表す複合動詞は中国語の複合動詞によって対応不可能であるが、ここでは、継続の「-続ける」というアスペクトに関係する局面動詞で説明する。

### 4.2.1 継続を表す $V_2$

#### 4.2.1.1 「-続ける」に対する考察

（11）a. 彼女が僕の心の中に引きおこすこの感情の震えはいったい何なんだろうと考えつづけていた。（ノルウェイの森）

b. 考え続ける→［Ag, Th］

c. 一直在思索她在我心中激起的這種感情震顫究竟是什麼東西。（挪威的森林）

（12）a. 今後も米軍の病院で生き続けるであろう。（野火）

b. 生き続ける→［Ag,　］

c. 今後也許會在美軍的醫院裡繼續活下去。（野火）

（13）a. 道は燃え続ける野火の中を通っていたが、私はそれを越えて行くことが出来なかった。（野火）

b. 燃え続ける→［　, Th］

c. 道路在燃燒著的野火之中，我無法從那裡穿過。（野火）

「-続ける」の語彙概念構造は（14）のように想定できる。

（14）a. 他動詞と結合する場合→他動詞：（11）考え続ける

$[x_i$ CONTINUE $[_{EVENT}$ $x_i$ ACT ON y]]

b.非能格自動詞と結合する場合→非能格自動詞：（12）生き続ける

$[x_i$ CONTINUE $[_{EVENT}$ $x_i$ ACT]]

c. 非対格自動詞と結合する場合→非対格自動詞：（13）燃え

続ける

[[EVENT y BURN] CONTINUE]

事象の継続を表し、完結性を持たない。よって、動作動詞を表すLCSである。(11)～(13)からみると、中国語では、継続の「-続ける」を表す対応表現として、複合動詞の形ではなく、以下の5種類が対応する。

(15) a. 動詞“繼續 jì xù”と補文からなる動詞句(12c)

b. 動作の継続か状態を表す副詞“一直 yī zhí”+在 zài+動詞+(著 zhe)(11c)

c. 動詞+“著 zhē”(13c)

d. a b c が組み合わさった形式

## 4.3 まとめ

それでは完了、継続、また、ここでは例を挙げていないが、始動というアスペクトに関わる機能をもつ $V_2$ を用い、時間順の原則、結果性と完結性との関係は表1のようにまとめてみる。

表1

| 複合動詞 | -始める | -続ける | -終わる/終える |
|---|---|---|---|
| 時間順の原則に従うか[7] | ○<br>(重複関係) | ○<br>(重複関係) | ○<br>(重複関係) |
| 結果性 | × | × | × |
| 複合動詞に完結性を持つか | ○ | × | ○ |

簡単に説明すると、完了の「-終わる/終える」、始動の「-始める」は瞬時の動作を表すので、着点というのがあり、完結性を持つ。一方、継続の「-続ける」は完結性を持たないのは言うまでもない。よ

[7] 但し未遂、再試行、可能を表す複合動詞は事象に時間順が明白でない。よって、時間順の原則を日本語の補文関係の複合動詞において必要な条件としない。

って、複合動詞全体が完結性を持たない。そうすると、複合動詞全体が完結性を持つかどうかにもかかわらず、日本語において複合動詞になりうる点を指摘したい。他方、3 つのタイプともに結果性を持たないことに注意されたい。結果性を持つ動詞とは、基本的に目的語ではなく主語が状態変化を被る動詞のことを指す。よって、「彼は宿題をやり終える/やり終わる」という複合動詞の解釈：彼が［(自分が)宿題をやること］を終えるは、結果性ではなく、完了だけ示す。「-始める」も「-続ける」も同様である。

次に、時間順の原則に従うかどうかについて、「-終わる」、「-続ける」と「-はじめる」という局面動詞は $V_1$ と $V_2$ が同時に進行しているという重複関係（overlap）を表す。しかし、未遂のような事象に明白な時間関係を持たない複合動詞もある。それゆえ日本語の補文関係の複合動詞の派生は時間順を必要としていないと考えられるのである。

## 5. 中国語の補文関係の複合動詞

3.2.2 で述べたように、中国語で補文関係と考えられる複合動詞の多くは、「述補式」内部構造をとる。このタイプの複合動詞は後項補語が動詞も形容詞も来る。動詞の場合、非対格自動詞が来ることが多い。その述補式内部構造を項構造と語彙概念構造で分析すれば、（16）のように整理できる。

（16）a.項構造：

a1. 他動詞が非対格自動詞と結合する場合の項構造：［Ag, $Th_1$］＋［ ,$Th_2$］

→①他動詞：［Ag,$Th_1$=$Th_2$］（e.g.我穿破了這雙鞋。）

② 非対格自動詞：[ ,$Th_1$=$Th_2$][8]（e.g. 這雙鞋穿破了。）

a2. 非能格自動詞が非対格自動詞と結合する場合の項構造：[Ag, ]＋[ ,Th]→非能格自動詞[Ag, ]（e.g. 他

[8] a1.の結合は使役起動交替が起こる可能なタイプであるが、常にその交替が起こるわけではない。いくつかの条件を満たされて初めて可能である。その条件は紙面の関係上、次回に譲る。

跑累了。）

a3. 非対格自動詞が非対格自動詞と結合する場合の項構造：[　,$Th_1$]＋[　,$Th_2$]

→① 非対格自動詞：[　,$Th_1$＝$Th_2$]（e.g.我快氣死了。

② 他動詞：[Ca ,$Th_1$=$Th_2$]　（e.g. 這件事氣死我了。）

b. 語彙概念構造：[$_{EVENT}$ $x_i$ ACT（ON $y_j$）] CAUSE [$_{EVENT}$ BECOME $x_i$/$y_j$ BE AT-z]

しかし、補文関係と考えられる複合動詞は項構造と語彙概念構造で分析すると、項構造も語彙概念構造も（16）そのまま適用するわけには行かないのはなぜであろう。この章では補文関係の複合動詞の項構造と語彙概念構造は一体どのようになっているのか。また、結果性と完結性の関係はどうなるのかについて考えてみたい。

次から後項述語をフェーズマーカーと評価に分け、中国語の補文関係の複合動詞の LCS を検討していく。

## 5.1　フェーズマーカー（Phase=相）について

日本語において、ある出来事が、時間の中でどのような局面にあるのかを表し分ける文法的カテゴリーはアスペクト（aspect）という。中国語においても、アスペクト標識、例えば、「-了(le, 完了相)」、「-著（zhe, 継続相）」、「-過（guò, 経験相）」がある他に、同様にアスペクトの意味を表すが、述語本来の語彙的意味がまだ残っているタイプの〈-完 wán〉、〈-盡 jìn〉、〈-光 guāng〉、〈-住 zhù〉、〈-掉 diào〉、〈-好 hǎo〉等が考えられる。

Huang（2006:2-4）は Levin and Rappaport Hovav（1995）による結果表現について直接目的語の制限（Direct Object Restriction）によると、中国語の述補式複合動詞の補語は基本的に目的語指向であるが、目的語が非指示的名詞句、或いは目的語を伴わない場合、主語指向になるが、目的語指向のものは大多数であるというのは従来の分析である。本論文で扱う〈-完 wán〉、〈-盡 jìn〉、〈-光 guāng〉、〈-住 zhù〉、〈-掉 diào〉、〈-好 hǎo〉といった複合動詞はどちらにも属さない。陳

（2003）はこれらは $V_1$ 指向であると言っている。本稿ではこれらの複合動詞を補文関係をとるという観点で論じていきたい。

### 5.1.1 「相」を表す日本語の複合動詞の形式に対応可能なもの

上に挙げられるフェーズマーカーの〈-完 wán〉、〈-盡 jìn〉、〈-光 guāng〉、〈-住 zhù〉、〈-掉 diào〉は対応可能なものであるが、ここでは、〈-完 wán〉を例にとって考察する。

#### 5.1.1.1 〈-完 wán〉

ここでは実例をいくつか取り上げて、それぞれの $V_1$ と結合する LCS を見ていきたい。

（17）a. 大概是因爲過程太辛苦了，男孩跑完了之後便哭了起来。（作例）

b. 跑完→［Ev，］

c. あんまりにも辛かったろうか、男の子は走り終わると泣き出した。

（18）a. 唱完“桃花正開”，她突然“哇”地痛哭失聲。（活動變人形）

b. 唱完→［Ag，Ev］

c. 『桃の花盛り』を歌い終わると、静珍は突然「ウ、ウツ」と泣き伏した。（応報）

〈-完〉の語彙概念構造は次のように想定できる。

（19）a. 他動詞と結合する場合→他動詞：（18）唱完

[x ACT ON y]w CAUSE [BECOME w [BE AT-z]]

|

完

b. 非能格自動詞と結合する場合→非能格自動詞：（17）跑完

$[x_i$ ACT]w CAUSE [BECOME w [BE AT-z]]

|

完

c. 非対格自動詞と結合する場合：該当なし

以上の LCS から見ると、結果述語とする $V_2$ はイベント全体に対して叙述しているという補文関係 w が見られる。ここでは、上位事象が原因、下位事象が結果という関係が CAUSE で結びつくことにより、結果性を持つことが明示される。〈-完〉は行為の結果状態を表すので、複合動詞全体は新たな結果状態を生み出すことによって必然的に運動が終了する意味を含意するので、完結性を持つ。

### 5.1.2 複合動詞の形式に対応不可能なもの

フェーズマーカーを表す中国語における複合動詞の中には、日本語の複合動詞によって対応できないものがある。ここでは、〈-好 hǎo〉を例にして考察する。

#### 5.1.2.1 〈-好 hǎo〉（-動作が完了し、そして理想的な状態になる）

（20）a. 他穿好短大衣，卻没有走，而是默默地站在我的床邊。（輪椅上的夢）

b. 穿好→［Ag，Ev］

c. 彼はハーフコートを着たが、そのまま私のベッドの横に立ち尽くしていた。（車椅子の上の夢）

（21）a.燕寧顧不得擦汗，就忙着和維娜她們安置方丹在她的床邊坐好。（輪椅上的夢）

b. 坐好→［Ev，　］

c. 汗をふくのも忘れて、維娜と一緒に気ぜわしく方丹を彼女のベッドに座らせた。（車椅子の上の夢）

〈-好〉の LCS は次のように想定できる。

（22）a. 他動詞と結合する場合→他動詞：（20）穿好

$[_{EVENT}\ x_i$ ACT ON $y_j]_w$ CAUSE [BECOME w [BE AT-z]]

|

好

b. 非能格自動詞と結合する場合→非能格自動詞：（21）坐好

[EVENT $x_i$ ACT] w CAUSE [BECOME w [BE AT-z]]

|

好

c. 非対格自動詞と結合する場合：該当なし

〈-好〉は〈-完〉の意味とほとんど同じであり、いずれも動作が完了した結果を表すが、〈-好〉はさらに理想的な結果の状態で完了した意味を表現する。

## 5.2 評価に関する $V_2$

### 5.2.1 日本語の複合動詞によって対応可能なもの

評価に関する中国語の複合動詞には、〈-慣 guàn〉、〈-膩 nì〉、〈-對 duì〉、〈-錯 cuò〉、〈-多 duō〉などがあるが、日本語の複合動詞によって対応可能な例として、〈-慣 guàn〉について考察する。

#### 5.2.1.1 〈-慣 guàn〉（-することに慣れる）

（23） a. 孩子們也許看慣了媽媽的啼哭，呆立了一會，便慢慢走開，仍去玩耍。（關於女人）

b. 看慣→[Ex, Th]

c. 母親が泣くのを見慣れているのか、子どもはぽかんとつっ立っていたが、もとの遊びにとことこもどっていった。（女の人について）

（24） a. 不過他們是走慣了的，路雖然曲折，還可以摸索地走。（家）

b. 走慣→[Ex, Ev]

c. しかし慣れた路ではあるし、曲折してはいたが手探りで歩いた。（家）

（25） a. 他從小凍慣了，從来不怕冷。

b. 凍慣→[Ev, ]

c. 彼は小さいころから寒さに慣れているので、寒さに強い。[9]

[9] （25）a.は《汉语动词-结果补语搭配辞典》から引用した例であるが、訳文は筆者による。

〈-慣〉の語彙概念構造は次のように想定する。

（26）a. 他動詞と結合する場合→他動詞：（23）

［x ACT ON y］w CAUSE［BECOME w [BE AT-z]］

|

慣

b.非能格自動詞と結合する場合→非能格自動詞：（24）

［x ACT］w CAUSE［BECOME w［BE AT-z]]

|

慣

c. 非対格自動詞と結合する場合→非対格自動詞：(25)

[x FREEZE] w CAUSE［BECOME w [BE AT-z]

|

慣

〈-慣〉は基本的に目的語ではなく、主語を叙述しているといわれている。つまり、例えば、（23）の〈孩子們看慣了媽媽的啼哭〉という文なら、目的語の〈媽媽的啼哭〉ということに慣れているというのではなく、主語の〈孩子們（子供達）〉が慣れていると解釈するのが従来の分析である。「出来事」に慣れること、即ち、イベントに対して叙述すること、要するに“孩子們看媽媽的啼哭（子供たちはお母さんの泣くのを見ること）”に慣れているという補文関係で考えられると指摘したい。

### 5.2.2　日本語の複合動詞の形式によって対応不可能なもの

#### 5.2.2.1　〈-對 duì 〉（～することが正しい）

ここでは〈-對 duì 〉の例を取り上げてみていく。

（27）a. 他說對了。(作例)

b. 說對→[Ag，Ev]

c. 彼のいうとおりである。

（28）a. 路走對了。(作例)

b. 走對→[Ag，Ev]

c. この道が正しい。

〈-對〉の語彙概念構造は次のようになる。

（29）a. 他動詞と結合する場合→他動詞：（27）說對

[x ACT ON y]w CAUSE [BECOME w [BE AT-z]]

|

對

b. 非能格自動詞と結合する場合→非能格自動詞：（28）走對

[x ACT]w CAUSE [BECOME w [BE AT-z]]

|

對

c. 非対格自動詞と結合する場合：該当なし

〈‐對〉は意味上から考えると、例えば、“我們走對了路”（私たちは正しい道を歩んだ）の場合、目的語指向で、目的語〈路〉（道）が正しいという読みが可能であるが、「歩んだ道」が正しいという読みがより適切だと思うので、「歩んだ道」というイベントをとることを提案する。

## 5.3 まとめ

本稿で取り上げた中国語の複合動詞は典型的な中国語の複合動詞の LCS[$_{EVENT}$ x ACT（ON y）] CAUSE [$_{EVENT}$ BECOME x/y BE AT-z] とほぼ一致するが、ただ $LCS_2$ は $LCS_1$ を包括することが異なる。補文関係はまさに $V_1$ 指向の複合動詞の中身だと考えられる。

本稿での考察によって明らかにした事実に基づくと、中国語の前項と後項が補文関係を示す複合動詞について、時間順の原則、結果性と完結性との関係は表 2 のように表示できる。

表 2

| | 中国語の補文関係の複合動詞 |
|---|---|
| 時間順の原則に従うか | ○（前後関係） |
| 結果性 | ○ |
| 複合動詞に完結性を持つか | ○ |

「表 2」に基づくと、中国語の補文関係の複合動詞は CAUSE という述語で結果性を持つことが分かる。結果性を持つので、複合動詞全体が完結性を持つことにも繋がる。また、語順から見ると、$EVENT_1$ が必ず $EVENT_2$ より先行しなければならないので、時間順に依存していることも分かる。

それでは、日本語と中国語の補文関係の複合動詞の相違点を表 3 にまとめる。

表 3

| **補文関係の複合動詞** | **日本語** | **中国語** |
|---|---|---|
| 1）結果性を必要な条件とするか | × | ○ |
| 2）完結性を必要な条件とするか | × | ○ |
| 3）語順は時間順の原則に従うか | × | ○ |

表 3 からみると、「完結性」は日中両語の相違とも言えるかもしれないが、要するに、完結性は日本語の複合動詞において必要な条件ではない。しかし、中国語における複合動詞にとっては、必要な条件である。加えて、中国語の複合動詞の完結性は、まず結果性があるので、それに繋がるが、日本語の複合動詞に完結性を持つものは、結果性を示しても、示さなくても文として成り立つ。その結果、日

中両言語の複合動詞の最大の相違点は「完結性」ではなく、「結果性」であるという結論が導き出される。以上から考えると、結果性があるものは完結性に繋がるが、完結性を持つ複合動詞でも必ずしも結果性に繋がるわけではないと言えるであろう。

## 6. 今後の課題

今後の課題について述べておく。

本論文は望月（2006）で述べられている中国語の述補式複合動詞は補文関係という新たな意味関係が存在するという考え方に引き続く。その考え方は正しいとすれば、日本語と同様、統語的複合動詞と見なされるのであろうか。

影山（1993：74－97）は、日本語の複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞とに分類する基準として、5 つの統語的操作、即ち、代用、尊敬語化、受身化、サ変動詞による置換、重複という統語的操作を提案しているが、こうした統語的操作は、中国語にはまったく適用できない。中国語において、語彙的複合動詞と統語的複合動詞とに分ける唯一可能な統語的操作は、可能補語‘得、不’を挿入できるかどうかということしかない。果たして可能補語の挿入の可否が、語彙的複合動詞か統語的複合動詞かを判断するのに十分な基準となりうるのかということも、今後の課題として、考察しなければならない。

さらに、結果性の条件、時間順の原則以外に、日中両語の複合動詞の結合に関わる原則と制約を探求していくことが必要となる。

## 7. 結論

本稿では、日本語の補文関係の複合動詞と中国語の補文関係の複合動詞を、項構造、語彙概念構造の 2 つの観点から分析した。

その結果、分かったことは、第一に、項構造レベルだけでは、両者とも、その派生のメカニズムが明示されない、ということである。語彙概念構造により、補文の部分が一目瞭然であるので、述語で日

中語の 2 つの事象の間の関係が分かる。

第二に、「時間順と語順の原則」については、中国語の補文関係の複合動詞の語順は、時間順を反映しており、前項（$V_1$）は常に後項（$V_2$）より先行しなければならないので、時間順の原則に従う。

一方、日本語の補文関係の複合動詞の語順は、事象に時間の前後関係が明白な場合は、「時間順の原則」に従うともいえるが、日本語の統語構造が、［目的語節（＝$V_1$によって組み立てられる補文）＋$V_2$］という統語構造をとるため、日本語の複合動詞の語順は、統語構造の反映であるという方がより妥当であろう。

第三に、動詞と動詞との結合により、複合動詞全体がどのような項構造タイプの動詞になるかという問題については、日本語においては、影山（1993）で提案されているように、$V_2$の項構造は、内項に Event をとり、そこに前項述語がそのまま埋め込まれるという分析である。この分析に基づき、$V_1$と $V_2$の外項は異なる意味役割を担う場合、$V_2$の項が受け継がれていると見られる。例えば、「故郷の景色を見慣れた」を例にして、項構造を見てみると、見る：〈Ag, Th〉、慣れる：〈Ex, Ev〉→見慣れる：〈Ex, Ev〉というようになる。よって、複合動詞の項は $V_2$の項が受け継がれている。中国語の補文関係の複合動詞も、やはり、日本語と同じように $V_2$の項が複合動詞の項構造を決めている点が見出される。

結局、日本語と中国語の補文関係の複合動詞において、大きな相違をみせるのは、結果性を持つか否かである。これは、両言語のどのような類型的特徴と関連付けられるのだろうか。

「複合動詞の内部構造が、統語構造の反映である」という一般的原則から考えると、日本語及び中国語の補文関係の複合動詞は、それぞれ、以下のような統語構造の反映である。

（30）日本語の補文関係の複合動詞の元になる統語構造

| 目的語節 | ＋ | 動詞 |
|---|---|---|
| ↓ | | ↓ |
| $V_1$ | | $V_2$ |

（31）中国語の補文関係の複合動詞の元になる統語構造

動詞　＋　結果補語

↓　　↓

$V_1$　　$V_2$

(30)が示すように、日本語の補文関係の複合動詞の $V_1$ にあたる部分は、目的語節からの派生であるため、複合動詞全体の結果性に繋がらない。一方、中国語においては、(31)が示すように、補文関係の複合動詞の元になる統語構造は、結果補語構文であるため、ある複合動詞に対して結果性を要求する、と考えられる。

こうした日中語間の相違は、句の主要部が日本語では右、中国語は、少なくとも動詞句に関しては、左である、という類型論的特徴の反映でもある。動詞句において、主要部である動詞が右にこなければならない日本語では、動詞の後に目的語や結果表現をおくことができないのである。一方、主要部である動詞が英語と同様、左にくる中国語では、動詞の後に結果表現をおくことができる。中国語の複合動詞の典型が、結果補語構文からの派生とみなせる、というのは、動詞句の主要部左という統語的特徴のみならず、Tai(1984)が主張するように、中国語が結果重視類型の言語である、ということとも深いかかわりがあると思われる。

**参考文献**

日本語

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

影山太郎（1996）『動詞意味論 - 言語と認知の接点 - 』くろしお出版

影山太郎･由本陽子（1997）『語形成と概念構造』研究社

影山太郎（2001）『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト - 現代日本語の時間の表現 - 』ひつじ書房

中島悦子　（2007）『日中対照研究 ヴォイス - 自・他の対応・受身・使役・可能・自発 - 』おうふう

長谷川信子（1999）『生成日本語学入門』大修館書店
姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
望月圭子（1990）「動補動詞の形成」『中国語学』第 237 号，128-137. 中国語学会
望月圭子（2006）「補文関係を持つ VV 型複合動詞 - 日本語と中国語の対照から -」『言語情報学研究報告』No.11,51-68. 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科
望月圭子·施姵伃（2006）「補文関係の複合動詞：日本語及び中国語の場合」『GP 言語班報告集』東京外国語大学
由本陽子（2005）『複合動詞·派生動詞の意味と統語　モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房
鷲尾龍一・三原健一（1997）『ヴォイスとアスペクト』研究者出版

中国語

陳光明（2003）《現代漢語動相標誌的研究》國立清華大學
Li＆Thompson 著・黃宣範譯（1983）『漢語語法』文鶴出版有限公司
吕叔湘 主編（1999）《现代汉语八百词(增订本)》商务印书馆
湯廷池（1992）〈漢語語法的併入現象〉《漢語詞法句法三集》臺灣學生書局
湯廷池（1992）〈漢語述補式複合動詞的結構、功能與起源〉《漢語詞法句法四集》臺灣學生書局
望月圭子（2004）『動詞的使動與起動交替：漢、日語的對照研究』國立清華大學 博士論文
趙元任（1980）《中國話的文法》臺灣學生書局
朱德熙（1983）《語法講義》商務印書館（香港）股份有限公司

英語

Baker, Mark 1988. *Incorporation : A Theory of Grammatical Function Changing*. The University of Chicago Press.

Dowty, David 1979. *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht:Kluwer.

Huang, C.T. James 2006. Resultatives and Unaccusatives: a Parametric View. 『中国語学』253 号,1-43.日本中国語学会.

Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. MIT Press.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav.1995.Unaccusativity: *At the Syntax-Lexical Semantics Interface*.. MIT Press.

Tai, James H-Y. 1984. "Verbs and Times in Chinese: Vendler's Four Categories", in *Lexical Semantics*, p.289-296, Chicago Linguistic Society.

Tai, James H-Y. 1985 Temporal sequence and Chinese word order. In John Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*, 49-72. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in Philosophy.* Cornell University Press.